

狩野元信周辺の肖像画制作について —細川氏との関わりから—

池田芙美（サントリー美術館）

狩野派の二代目・狩野元信は「細川澄元像」（永青文庫蔵）や「鄧林宗棟像」（龍安寺蔵）など、肖像画の名品を複数残している。なかでも「鄧林宗棟像」は図上の賛に元信筆であることが明記され、元信本人による肖像画の基準作に位置付けられる。本作については、鄧林の弟子による発注であり、その制作には細川氏が関与したとされてきた。しかし、制作を指揮した人物について、これまで具体的に論じられることは無かった。本発表では、本作の制作に鄧林宗棟の実の甥・細川高国が関わった可能性を指摘する。

鄧林宗棟は細川教春の嫡子として生まれ、細川勝元の養子となった。そして、勝元と山名宗全による応仁の乱に次期棟梁として参戦したが、和睦後は責任を取って出家した。出家後は妙心寺のキーパーソンとして活躍したことが『宣胤卿記』や三条西実隆著『実隆公記』などから判明するが、『延宝伝灯録』によれば、その背後には高国の存在があったとされる。加えて、鄧林の法弟・大休宗休が著した『見桃録』によれば、高国の猶子・直指宗諤は鄧林の弟子とされ、鄧林と高国が親しい関係にあったことは確かである。高国は元信に鞍馬寺縁起絵巻の制作を依頼しており、本作もまた高国を通じて元信に発注されたと推測される。

さらに、伝元信筆「飯尾宗祇像」（ボストン美術館蔵）についても、その背景に細川氏や鄧林を中心とした人物ネットワークが存在したとする仮説を提示したい。連歌の大成者・宗祇の肖像とされる本作は、騎馬姿で描かれた珍しい作品である。その制作経緯については、宗祇の弟子・宗碩や、実隆との関連が論じられてきた。しかし発表者は、宗碩と同じ宗祇の弟子である玄清も本作の制作に関わったと考える。玄清は細川氏庶流家の被官に出自しており、玄清が草庵を結んだ折、鄧林から帰牧庵という名を与えられるなど、鄧林とも交流があった。そして『実隆公記』によれば、妙心寺が大徳寺から独立する際、玄清は鄧林とともに妙心寺側の協力者として動いていた。加えて、鄧林が玄清の草庵で興行した連歌会には、宗祇・宗碩・実隆らが参加しており、彼らが同じ文化圏に属していたことは明らかである。

「飯尾宗祇像」の馬の姿態は、伝狩野正信筆「騎馬武者像」（地蔵院）や、高国の義弟を描いた「細川澄元像」を踏襲しており、とくに「細川澄元像」の存在を知っていた人物が「飯尾宗祇像」を発注したならば、異色の宗祇像が誕生した理由も肯ける。もちろん「飯尾宗祇像」は元信の真筆ではなく、有力な弟子による作とされるが、緻密な面貌表現は見事であり、元信が一切関知しなかったとは考えにくい。

肖像画は、絵師と像主・注文主との密接な関係が端的に表れるジャンルである。顧客の拡大に努めた元信にとって、細川氏が大変重要な存在であったことは言うまでもない。「鄧林宗棟像」および「飯尾宗祇像」からは、元信のパトロンとしての細川氏の姿が浮き彫りになるのである。